
24歳引きこもり、高校生になる！

おにぎり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

24歳引きこもり、高校生になる！

【Zコード】

Z6959V

【作者名】

おにぎり

【あらすじ】

私は高校で友達がいない。あることがきっかけで、隣の席の人と話すようになるが、これって「友達」なのだろうか？

1 (前書き)

更新速度は今のところよくわかりませんが、頑張ります。

高校に入学して十日が経つた。

私は今日も独りでお弁当を食べている。人気のない体育館の裏でひつそりと。

そう、私にはまだ友達がない。

中学時代の友達とは学校が別々になってしまった為、ゼロからの友達作りとなり苦戦を強いられている。

私は人見知りである。自分からはなかなか声をかけられない。かと言つて、逆に声をかけてもらうこともあまりない。思うに、私は声をかけたくないような子なのだろう。

根暗で感じが悪い。これが私。

中学までは世話好きの幼馴染のおかげで何とかやってこれたのだが、学校が別れた今はその恩恵を受けることは無理だ。自力で乗り切らねばならない。

(受験、失敗したからなあ)

幼馴染や友達は皆、公立高校に進学した。私だけが不合格でやむなく滑り止めの私立高校へ行くことになつたのだ。

「はあ」

ため息をつきながらお弁当を食べるのが、もはや日課となつている。

空を見上げれば綺麗な青空。

何だか無性に泣きたくなつた。

独りでもいいと開き直れる強さは持ち合わせていないので、休み時間のたびに教室を抜け出して適当に時間を潰す。

こういう単独行動が、友達が出来ないことに拍車をかけている。と氣付いたのは入学して一週間目のことだった。

(私つてバカ？)

お弁当を食べ終わると、いつも読書をする。

今日読んだ本は私と似た内向的な性格の主人公なのだが、私と180度違う点は、友達がいなくても教室に居続けたところだ。そしてある日チャンスが巡ってくる。教室に「ゴキブリ」が出没し、クラス中が大騒ぎになるのだ。そんな中、主人公は平然と「ゴキブリ」を撃退し、一躍ヒーローとなる。それがきっかけで友達が出来た、という話だ。

(ぐだらねー)

ま、内容はともかく、人生何が起こるかわからないと氣付かされた。ふとしたことがきっかけで友達が出来るかも知れない。一応、私も中学時代は幼馴染のおかげとはいえ、行動を共にする友達がいたわけだし。

もし教室にいたら「次の授業、私当たるんだけどこの問題がわからなくて……。竹尾さん（私の名字）」、もしわかつたら教えてくれない？」とか、聞かれたりすることもあるかもしれない。そんなうまくいくわけないとも思つけど、人を避けて独りで「過ごし続けるよりかは確率は上がるはず。

（さて。思い立つたが吉口と言つよね。残りの昼休みを早速教室で過ごしてみようか）

私は空になつた弁当箱と本を持って、ようやく重い腰を上げた。

同じことを繰り返して申し訳ないが、私は独りでもいいと開き直れる強さは持ち合わせていない。忘れてた。

ザワザワと賑やかな教室に一步足を踏み入れてすぐに後悔する。誰も私の存在なんか気にすることなく、お昼を食べながら談笑しているだけなのだが……。

(う。この疎外感。孤独感。泣きそ)

回れ右をして出て行きたいけど、クラスメイトに変に思われないか、とか人の目を気にして動けない。いや、そもそも誰も私の方なんか見てないのだが。

そうだ。誰も見ていないんだから気にするな、私は空氣。空氣なのだ。と自分に言い聞かせながら一步ずつ進む。

誰かとコミュニケーションを取りにきたのに、空氣になつてどうするんだ？ と途中で気付いたが、とりあえず席に着く。

右隣の席に座ってる男子がチラリと私の方を見たような気がしてビビるが、私だって隣に誰か座つたらチラ見することもある。気にしない、気にしない。

しかし席に着いたはいいが、見晴らしのいい視界に思わず首をかしげる。

（何故か周りに人がいないんですけど？）

私の位置は教室のほぼ真ん中で、前後左右すべて囲まれた席なのだが、右隣に男子が一名いる以外、私を中心とした半径三メートルぐらいの座席が綺麗に空席だった。

（????）

この現象は一体どういうことなのだろうか。

こんなにあからさまに避けられるくらい、私は嫌われているということなのだろうか。しかし普段は教室にいないのだが……。では私が不在でも席の近くにいることすら無理だということなのか。

どん底に気が滅入ってきた。

クラスメイトの楽しそうな笑い声が聞こえてくると自分が笑われているような気になるし、ヒソヒソと小声で話されれば私の陰口を言われているような気になる。

何故こんなに嫌われるのだろう。

（……もしかして、クサイとか？）

仮に私が臭いとしたら説明がつく。机やイスにもニオイが染み付いて、半径三メートル以上離れていないときついとか。（いやいや、そんなバカな）

中学の時は臭いとか言われたことがなかつたし、第一、すぐ隣に男子が一人座つていいのではないか。

そこでハタと気付く。

（真犯人はお前か！）

皆は私を避けているのではなく、きつとこの男子を避けているのだ。

私は直視するのが怖いので、顔は正面を向いたまま右隣の様子を探つた。

男子は本を読んでいる。漫画だ。しかも私も知つてゐる漫画だ。兄が買つてゐる漫画だが、非常に続きが気になつていてやつだ。（最新刊出てたのか……。お、やはりあの伏線はこつとうわけだつたのか。と見せかけての、おおつ）

この漫画はいい感じに期待を裏切る。今回も楽しませてくれそうだ。

しかし盛り上がる氣分に水をさすかのよつて、漫画はパタンと閉じられた。

（おいおい、いいといひで！）

思わず舌打ちしそうになるのを堪える。

「よかつたら読むか？ 俺は他のもあるから」

ぶつきら棒な口調だが、言つてることは親切で、「どうせ」と机の上に漫画が置かれる。

「えつ、いいの？ ありがとうー」

私は満面の笑みで漫画を手に取る。一応自覚していふことだが、昔から漫画を見るテンションが上がつてしまつ。だからこの男子がみんなに避けられてることなど、頭からスッカリ抜けていた。

男子の顔もろくに見ずに私は漫画を読み始める。

わりと読むのは早い方なので、あつといつ間に読み終わつた。

「ありがとう」

高校ではいつも俯いてばかりで、人の顔なんてろくに見たことがなかつたが、この時初めて男子をまともに見た。

(え？ 男子……じゃねー！)

驚きのあまり動きが一時停止してしまつたかもしれない。
男子じゃないからといって女子でもない。性別は男で間違いはない。

何と言うか、男子という言葉が似つかわしくないというか……、つまり『大人の男性』なのだ。

オッサン顔つてわけでもない。顔は結構男前で、二十代半ばぐら
いに見える。体格も出来上がりでいて高校生らしさが全くな
い。大人っぽいとかではなく、どこをどう見ても『大人』だ。

(大人が何故、学制服着て座つてるわけ？)

これは何かのイタズラではないだろうか。私はそう疑つた。
例えばこの人は先生とか。

(うん。先生つて線が濃いな)
納得のいく答えが出たところで、ちょうど昼休み終了のチャイム
が鳴つた。

授業は滞りなく行われた。

空いていた席も、先生が来る直前にはどこからともなく現れた生徒らによつて埋まつてゐる。

私の右隣の人にツツコム人は誰一人いない。先生すら何も言わないのだ。

（何故？）

右隣の人は板書を書き写したりメモを取つたりして、普通に授業を受けてゐる。

私には大人が高校生のコスプレしてるようにしか見えないのだが……。

（ああクソ。右が気になつて授業に集中できやしねえ）

右だけでなく周りの様子も気になつて、そつと見回す。だが私のように気にしてる者などいなかつた。

もしかして、この状況つて今に始まつたことではないのだろうか。そもそもこれはイタズラや冗談ではない？

（高校生つて、大人でもなれるんだっけ？）

私は事態を眞面目に考えてみた。

諸事情により中学卒業後に高校に行けなかつた人が、大人になつてから定時制や通信制高校に行くことはある。

全日制ではあまり聞いたことがないが、あり得ないことではないだろう。

昔、そういう設定の漫画読んだことあるし。

（ま。イタズラにしてもマジにしても、どうでもいいけど）

時間の経過とともに、動搖していいた気持ちも落ち着いてきた。

よく考えると、この人が高校生だろうが高校生じゃなかろうがどちらでもいいじゃないか。私には関係のないことだ。

大人になつてから学ぼうとする志は尊敬するが。

放課後。

いつも通り独りで駅までの道のりを歩いた。
改札の前で財布を出そうとカバンを開ける。
財布を捜す。

もう一度、財布を捜す。
更に財布を捜す。

(ウソツ！？)

サーーツと血の気が引いていくのを感じた。

(お、落ち着いて。もう一回捜そう……)

もう一回どころか、しつこいぐらいカバンの中を捜す。
だが財布は見当たらなかつた。

私は財布に定期券を入れている。財布がないということは定期券

もないということなので電車に乗れない。

不運なことに今日は携帯電話を家に置いて来ている。

(何でこういう時に限つて携帯忘れてくるかなあ！)

これでは家族に連絡できない。

(どうしよ)

駅員さんに頼んだら電話ぐらい貸してくれるだらうか。

(でも頼むの嫌だな)

自分から話しかけるのは、非常に勇気がいると同時にストレスだ。
それにわざわざ電話を借りても、家の電話番号しか覚えていない
ので、この時間帯は誰も家にいない可能性が高い。

学校に戻つて、先生に事情を話したらお金を貸してもらえるだらうか。

(でも担任の先生つてどんな先生だっけ？)

あまりインパクトのない顔だったので、まだ覚えていない。

私は基本的には人の顔を覚えるのが苦手だ。

学校に引き返すのも面倒だけど、先生を捜すのにも一苦労しそうな予感がする。

友達がいれば友達を頼れるのに。

さつきから同じ学校の人が何人も私の横をすり抜ける。制服で同じ学校だとわかるが知らない人ばかりだ。

だから誰も私のことなんて気には留めない。

(うつう)

最近私は情緒不安定だ。

込み上げてくる感情を必死に堪える。

(泣くな。こんなところで泣いたら恥ずかしそぎる)
とりあえず改札前から壁際に移動して深呼吸する。

「具合悪いのか？」

ふいに横から声をかけられて慌てて目をこする。泣いてはいないのだが、少々涙目になっていたので。

そして顔を上げると、サラリーマンが私を心配そうに見下ろしていた。

(誰だ？)

ピシッと格好良くスーツを着こなした大人の人。

どこかで見たことがあるような、ないような。

兄の知り合いという可能性もあるが思い出せない。

いや、私の勘違いでこの人は全く初対面の親切な通行人かもしれない。

「そこのベンチまで歩けるか？」

私が壁際にうつむいていたから、具合が悪いと勘違いしているようだ。

「いえ、大丈夫です。具合が悪いわけじゃないんです。ちょっと財布と定期券をなくしてしまって、どうしようかなって……」

何、正直に話してんだ私は。これでは金を貸してくれって言つてるようなもんだろう？

でもこの時の私はすっかり心が弱つてて、ワラにもすがりたい気持ちだったのだ。

それにこの人、やつぱりどこかで会ったことがあるような気がして。

「最寄り駅どこ？」

「えっと、ここから三駅目の……」

「じゃあ、五百円もあれば足りるな」

そう言って千円札を私に差し出した。

（え？ 小銭なかつたのかな？）

「一百五十円で切符は買えるのだが。まあいいか。

「ありがとうございます。すぐに切符を買って、とりあえずお釣りはお返しありますね。残りの切符代は……」

「こらない。少しはお金持つてないと不安だろ。それにその千円、そもそも貸したんじゃなくてあげたんだから返さなくていい」
「なんと。千円もの大金をくれるというのか！」

（流石だな。大人は！）

しかし千円くれるからって、「はい、ありがとうございます」とアッサリもらうような教育を親から受けた覚えはなく、そう簡単に受け取れない。

「でも、そういうわけには……」

とりあえず渋る。借りるのも心苦しいのに、もらひのは更にハードルが高い……。

だが返すにしても連絡先を交換したりしなくてはいけない。非常に面倒くさい。もらつてしまつた方が後処理がなく楽だ。もしかしてそのことまで考えて、このサラリーマンは私に千円をくれるって言つてているのかもしねり。

やつぱりもらおう。と心に決めたが、私よりも先にサラリーマンが口を開いた。

「じゃあ、明日学校で返してくれればいいから

「はい？」

私は理解できずに首を傾げた。

学校で返すということはこの人も学校にいるということになるが

……。

先生なのか？　いや、事務員という可能性も。

「やっぱり体調も良くないんじゃない？　なんか目がうつるだぞ、

竹尾」

私は考え込むと、遠い目をしたまま動きが固まることがたまにあ
る。今、その癖が出ていたようだ。

と、私の癖はともかく、サラリーマンが私の名を知っている！
いや、もうサラリーマンじゃないだろう。
この人は先生なのだ。

そうか、どうも見たことがあるような気がしていたが先生だった
のか。

それにしてもスーツを着た先生なんていただろうか？

顔は覚えられないけど服装は結構覚えている。

うちの学校はわりとジャージとかポロシャツとかラフな格好の先
生ばかりだ。

（こんな紺色のスーツなんて……。生徒の制服と思いつきり色がか
ぶつてるし。いや、色だけじゃなくてデザインもよく似ているなあ、
ボタンに校章も入ってるし……。つていうか、もう制服じゃないか！
これ！）

自分でも驚くぐらいの鈍さで呆れるが、この人が着ているのは私
の学校の学生服だった。

思い込みとは恐ろしい。大人の人だったので、私の目にかかつた
フィルターのせいで学生服だとは認識できていなかつた。

そうか。やつとわかつた、この人は……。

「あなたは右隣の席の人ですね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6959v/>

24歳引きこもり、高校生になる！

2011年8月14日03時31分発行